

Fragrance in Hindu Culture

Chihiro KOISO†

Abstract

This paper analyzes the role and importance of various fragrances and scented materials in Hindu culture. First of all, the author takes a general view of fragrances in different countries, then describes the favorite scents of Indian people in general. The author provides a brief account of the history of scented materials in India and analyzes the role of scented materials in Hindu ritual. The ritual named “*Mangala Gaurī vrata*” (newly married women make petition for their happiness of families to Goddess *Gaurī*) is introduced, in which the devotees offer different kinds of scented materials, such as sandalwood paste, incense, pastille, camphor, lamps of burning oil or *ghī*, and fragrancd flowers to the deity. During the ritual, the deity is believed to descend towards the earthly level while the devotee ascends towards the divine, so that ultimately a state of union is achieved. Here the offerings and services to the deity embodied in its images are almost the same as the ones offered to human guests. For combining both deity and devotee, incenses and camphor (light and fragrance) play an important role. Fragrances purify the surroundings and sanctify the ritual space which helps devotees to concentrate upon the deity. This paper aims at an understanding of the meaning and symbolism of fragrance in Hindu ritual.

Keywords

Hindu, ritual, *Mangala Gaurī vrat*, fragrance

ヒンドゥー文化におけるにおい

小磯 千尋†

キーワード

ヒンドゥー, 儀礼, マンガラ・ガウリー誓戒儀礼, 香り, におい

† shunya@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

1. はじめに

初めて訪れる国・都市では、最初にそこで感じるにおいによって、その国・都市が好きになるか否かが決まるといっても過言ではない。においは「快・不快」、「好・嫌」を決定するバロメーターでもあり、理屈を超えた本能的な部分と結びついている。動物にとっては生命の危険を察知する手段でもある。ウサギによるニオイづけは二重の役割をもっているという。一つには、なわばりのしるしとしてのニオイのついた糞を見つけたとき、外部のウサギをもとに引き返させるのに役立つ。もう一つは、そのニオイのついた糞によってそのウサギの地位の上下が示される（パートン1976：131）。そしてまた、人間の豊かな精神生活とも切り離せない重要な側面をもっている。

「におい、匂い、香り」というものは言葉や色・形などで表現しにくい特殊な情緒を伝えるものである。ある匂いを嗅ぐことによって同じ情緒が再現されるとがよくある。またある匂いを嗅ぐと普段思い出すこともないような、脳のひだから消えかかっていたような出来事や情景が思い出されることがある。においはある特定の記憶と密接に結びついていることが個々人の体験からも明らかであろう。においは、非常に個人的な、また非常に些細な記憶や情緒をひき出すきっかけになるものようである。

本稿は、記憶を喚起する装置としてのにおいの象徴性に焦点をあて、ヒンドゥー文化におけるにおいの意味を分析しようと試みるものである。

2. 民族によるにおいの位置づけ

「におい、匂い、臭い、香、薫り、艶ふ」日本語は他の言語に比べて、においを表す言葉が少ないといわれるが、漢字で表すとその意味する差異がイメージしやすくなる。また、「匂い」は本当に香りが出ているだけでなく、「雰囲気」ということも指す、非常に繊細で微妙な言葉で

ある。「香りは記憶することはできないが、喚起することはできる」（元木澤：1998）といわれる。忘れていた過去の出来事を思い出させる磁石のようなものといってもよい。香りとともにそのときの状況もあざやかに思い起こさせる作用がある。

においは、過去にそれを嗅いだときの状況や雰囲気、長い歳月を超えて、あたかもその場に自分が立っているかのように、ありありと私たちに想いださせてくれる（中村：179）。近年、脳科学とにおいの関係の解明が進み、においと記憶が直接的に結びついていることが知られている（元木澤：1998）。

英語ではにおい一般をodor、良いにおいと悪いにおいの違いも明確である。良いにおいはscent, fragrance, perfumeなどで、悪いにおいはstench, malodor, stinkなどである。smellは両方に使われるが、どちらかとうと悪い意味で使われる場合が多いようだ。花の匂いはfragrance、その花から抽出した精油のにおいがperfume。食べ物や飲み物を表す表現も多い。食品のにおいはflavor、酒類やスパイス、コーヒーのにおいはaromaが使われる。しかし、実際に文化的背景を知らないこれらの語の微妙な差異を理解するのは難しい。

インド・アリア諸語では、においを表す言葉は多くはないが、マラーティー語⁽¹⁾には、儀礼や食卓に欠かせないギー（精製バター）の香りを表すkhamang（香ばしい）という言葉がある。ヒンディー語では、におい全般をgandhといい、良いにおいには接頭辞su-をつけ、嫌なにおいにはdur-をつける。どちらからかという嫌なにおい、香り、気配、様子を表すbūがあり、これに接頭辞badをつけると悪臭を意味し、きれいな、健康などを意味する接頭辞khushをつけるとsugandhと同じ意味になる。同様な単語にbāsがある。これはマラーティー語とヒンディー語に共通の語である。おもに芳香を表すmahakはときどき「臭い」を意味す

る場合もある。薫り, 芳香, 薫香などを表す *gamak* もよく使われる。

中東イスラーム研究者片倉もところによると, イスラームのゆたかな時間を表す「ラーハ」は, 仕事でも遊びでもない時間で, 散歩をしたり, 乳香などを楽しむ, 知人を尋ねる, 瞑想したり, 神を思う祈りの時間などを指すという。片倉はこのラーハを「ゆとり」+「くつろぎ」-「りくつ」=「ゆとろぎ」(片倉: 7-10) と名付けた。このラーハ=ゆとろぎに代表される概念が, 異なる宗教, 文化に存在するのか否かは大変興味深い, これについてはこの稿では言及しない。各文化の生活におけるおのいの位置付け, その嗜好を分析することは, その文化をより深く理解できる一助となることは間違いない。片倉はイスラーム文化圏における客人へのもてなしとしてのにおいについて『移動文化考』, 『ゆとろぎ』において詳細に述べている。

客を家に迎える時は, 客が家に到着するまえに, 部屋中にお香をたきこめておき(片倉: 59), 客が到着したら, 客の頭の上に薔薇水のしずくを, はらはらとふりかけて迎え(片倉: 28), マドハンとよばれる香炉に香をくゆらせ, ひとりひとりに配る(片倉: 60) おしゃべりに興じ, 食事を楽しみ, アラビア・コーヒーを締めにしてくつろぎ, そろそろおひらきかなというころに, 手ひねりの香炉に炭火をおこし, 白檀のお香を焚いて, ひとりひとりにまわす。さいごのお香はおひらきのしるしなのだ(片倉: 60) という。

香料は英語でパフューム *perfume*, フランス語ではパルファム *parfum* である。由来はラテン語の *per fumum* で「煙によって」の意味からきている(荻野 1993: 174-75)。香料は古くからさまざまな民族で使われていたが, 儀式の際に, 必ず香木や芳香樹脂が焚かれ, 立ち上る香りが神に捧げられていた。

インドではアラブ諸国ほど日常生活において香りを用いないが, 祈りの場においてはさまざま

まなにおいが満ちている。次節ではインド人の好むにおいについてみていこう。

3. インド人の好むにおい

乾季で渴ききった大地に最初の慈雨の一滴が落ちた時のにおいは格別だ。日本でも夕立や打ち水をしたときの乾いた土がむせかえるようなにおいを強烈にしたにおいである。インドの人々はゲル *geru* (大地の香り) とよび, 誰もが大好きなおいだという。インドの新聞記事に, 「これは単なる大地のにおいだけではなく, 乾季の間ひっそり地中で息をひそめていた植物の芽が命を吹き返すにおいも混ざっているので, 格別な生命に満ちたにおいなのだ」という記事があった。実際, 雨が降った数日後には, 薄緑色の雑草がいっせいに芽吹きさまはこの記事の説を裏付けている気がする。

そのほか, 結婚式などのハレの場で来客に盛大に振りかけられるバラ水のバラの香りも好まれる。孔雀の形をしたバラ水入れの容器を振って, 部屋中にバラの香りをばらまく, インド流の客のもてなし方である。バラ水は飲み物の香りづけにも使われる。

香油を耳かきのような棒につけて, 来客の首などにつける歓迎法もある。これには数種の香油が用意されるが, カストゥーリー *kastūrī* と呼ばれる麝香⁽²⁾ や白檀⁽³⁾ *candan*, ジャスミン *camerī*, バラ *gulāb* などが好まれる。

インド独立の立役者マハートマー・ガンディーは, ガンディー *gāndhī* とよばれる香料, 香油製造販売, 香辛料・食品雑貨を商う商人カーストの出身である。香りを扱う商売がカースト名としても存在するように, インド社会においては香料, 香油が重要な位置を占めてきたことが分かる。

生活に密着したにおいの中でインド人が好むにおいの代表は, 家で手作りするギー *ghī* (精製バター) のかぐわしいにおいだという。純正ギーは家庭で数日分のクリームをまとめて作る

のが一般的である。よく攪拌して無塩バターを作り、その水分を蒸発させるとギーができる。ギーができる瞬間を「カマング *khamang* (香ばしい) な香りが満ちる」と表現する。このにおいを嗅ぐと亡くなった母親を思い出すと云った人がいる。

料理の美味しさには香りが一番重要である。食べ物を味わうときの香りは、鼻先から入る香はすくなく、咀嚼して飲み込むときに喉越しから鼻にぬける香りがほとんどである(東原2015:29)という。その意味では、インドのスパイスやハーブは暑い国で食欲を刺激する作用もあるようだ。日常的な食事に、クミン、コショウ、コリアンダー、ナツメグ、クローブ、シナモン、アニスなどのスパイスの香りが満ちている。

万国共通ともいえるご飯の炊けるにおいも好まれるにおいである。インドのコメの中で最高級品とされる「バースマティー *bāsmatī*」は花のような芳香がする。

また、カース *kās* (イネ科のワセオバナ) という独特の青臭さのある草の根の香りが清涼感をもたらす物として好まれる。インドの人たちは、夏の暑いときも冷蔵庫で冷やした水や氷入りの水は喉に悪いといって避ける。素焼きの甕に水を入れ、しみ出た水の気化熱を利用して冷やした僅かに土の香りがする水が好まれる。この水の中に、繭玉ほどのカースの根の塊を入れて香りづけすると最高の飲み水となる。カースは香油や食品の香りづけにも利用されている。

最近日本でも話題を呼んでいるコリアンダーの生葉(香菜/パクチー)のにおいと味はインド料理には不可欠だ。栄養面でもビタミンAが非常に豊富だという。全ての料理の飾りとして料理の上に飾ったり、ココナツや青トウガラシとともにペーストのチャトゥニー(チャツネ)に加工される葉は、独特の香りが南京虫のようだと苦手とする日本人も多い。香りの強いハーブのディルもインドでは野菜として調理す

る。強いクセのある味と香りを好むインド人が多い。

4. インドにおける香料の歴史概観

ここでは、インドにおける香料の歴史を、ヴェーダ文献、『エリュトラ海案内記』(西暦紀元1世紀ごろ)という古代の海上交易を具体的に知ることのできる史料、中国の僧玄奘がインドを訪れて著わした『大唐西域記』(646年)、マルコポーロが口述した『東方見聞録』(13世紀)の記述から概観したい。

興味深いのは、ヴェーダ文献にはほとんど香の記述が見られないことである。タントリズム⁽⁴⁾では *gandha-* (また複合語として、*~gandhi-*) は儀礼などにおける「芳香」で高尚なものに用い、*surabhi-* (酒などの芳香)、*adhivāsana* などが線香や抹香、香水として知られるようになるが、それらしきものがヴェーダ文献には見あたらない⁽⁵⁾。

『エリュトラ海案内記』の第38節から第62節はインドに関しての記述があるが、香料の交易にだけ焦点をあてて抜粋してみる。「乳香を輸入」(第39節)、「すぐれた香油が運びこまれた」「長胡椒が輸出される」(第49節)、「コッタナリケーと呼ばれる一か所のみで多量に産する胡椒が運ばれる」(第56節)、「内陸産のマラバトゥロン(肉桂樹の一種)…が運ばれる」(第56節)。これらの記述から、胡椒、シナモンなどのスパイスが輸出され、乳香などが輸入されていたことがわかる。第49節の「すぐれた香油」については、詳細は不明である。

玄奘の『大唐西域記』の印度の衣食の項には、「身には諸種の香料を塗る。いわゆる梅檀、鬱金というような香料である」(大唐西域記I:57)とある。梅檀は牛頭梅檀の名でしられ、鬱金はサフランをさす。他の項では、「ストゥーパを建てて供養を修し、サフラン(鬱金香)の香泥ですっかり上下ともに塗った(大唐西域記II:47)。旧王舎城付近の史跡、ブッダヴァナ

山の項では、「帝釈天と梵天王が牛頭梅檀の木を摩擦して如来の身に塗った所である。今もその石の上には余香が馥郁と香っている（大唐西域記Ⅱ：61）。牛頭梅檀とはゴーシールシャ・チャンダナ *gośīrṣa-candana*として有名であった。古くはサンスクリットでチャンダナとよばれ、紀元前5世紀頃にはすでに高貴な香木として使われていた。これは、当時からインドの名産品とされた白檀のことである。

「二人の召使がそれぞれ金盤を捧げ持ち、花・香をいっぱい盛り上げて出迎え、人々に、『池で沐浴し冠に香花を塗り、それから中にお入りになれますように』と言った」（大唐Ⅱ：66 巻第9）客を歓迎する方法として香りでもてなす伝統が窺える。

「カルニカーラ樹⁶⁾がどの谷間の道にもいっぱい、花は特によい香を含み葉の色は黄金色に輝いており、暮春の月には林は金一色である」（大唐Ⅱ：68 巻第9）

現グジャラート州のカティヤワール半島あたりを記述した項目では、「土地は砂地で花・果は少ない。胡椒樹を産出するが、その樹葉は蜀椒（四川省に産する香料）のようである。クンドゥルカ樹（乳香?）⁷⁾（焼香用の香料を供す）を産出するが、その樹葉は棠梨に似る」（大唐Ⅱ：162巻第11）

タントラにおける護摩供養に使われる香木、香料として以下のものがあげられている。

白檀, 沈香 (*Agaru*, ジンコウ), 多迦羅 (*Tagara*, サンユウカ), 丁香 (*Lavaṅga*, チョウジノキ) および桂心香などの塗香, 薫陸香 (*Kundurū*, インドニューコク), 乳香 (*Turska*, 同前), 安息香 (*Kalanusārin*, アンソクコウノキ), 甘桂香 (*Tagara*), 天木香, 竜腦香, 薩閣羅沙香, 烏戸羅香, 摩勤迦香, 香附子香, 青木香および鬱金香などの香を, また曳陀羅 (*Mandāra*, デイコ), 蓮華 (*Padma*, スイ

レンまたは-ス), 摩里迦 (*Mallaka*, マツリカ), 那婆摩利迦 (*Navamālika*, 同前), 膳菊 (*Campaka*, キンコウボク), 阿輸迦 (*Asoka*, アショカ), 多迦羅, 迦曇婆 (*Kadamba*, キヤダンバ), 迦尼迦羅 (*Karnikāra*, モミジノミウラジロ?), 阿婆那 (*Asana*, アサナ), 波羅罷 (*Pātali*, テリハボク?), 沙羅 (*Sāla*, サラノキ), 摩羅底, 群多, 奔那迦, 計沙羅, 底羅迦, 払利曳応旧, 戸多乾他および, 俱羅婆迦などの花と, 阿摩勤果 (*Āmalaka*, アンマロク), 迦必他果 (*Kapittha*, ナガ-ミカン), 波那沙果 (*Panasa*, パンノキ), 柿子 (*Timbaru*, インドガキ), 石棉采, 毘闍補羅迦果, 托応子, 羅句着果, 迦羅末多菓などの好菓を供養し, これらの供物を阿里迦樹の葉上におく。

満久崇磨『仏典の中の樹木：その性質と意義 (3) (護摩の樹木)』(p.17)

豊富な香木と塗香があげられているが、それらとともに、香り高い花も列挙されているのが興味深い。白檀を初めとする塗香と竜腦香つまり樟腦, 鬱金香などの香とが分けて列挙されている。タントラの秘儀的な儀礼には護摩による煙と香りの演出が不可欠であったことが窺える。

『東方見聞録』のインドの香料に関連する部分を抜粋してみると、「胡椒, シナモン, 生姜」また、ボンベイの近くのタナ王国で生産されていたとされる「褐色の乳香」への言及がある（東方見聞録：199）。他ではインド産の乳香についての記載はみられないが、インドでも乳香は産出されていたようである。当時のインドに存在していたとされるマアバル王国（マラーバル）については、胡椒, 生姜を大量に産出し、シナモンその他の香料も豊富に産していたとある（東方見聞録：182）。

インド以外に香料について言及がある国はジャワやスマトラがある。インドでも消費され

ていたであろう香料について言及があるところを引用する。

ジャワ島については、「甚だ裕福な島であり、胡椒、ナツメグ、ジャコウ、ガンショウ、バンウコン、クベバ、クローブなど、世界中の香料がここで生産される」(東方見聞録：172)とある。また、スマトラ島については、キャラ、ガンショウ、その他、ヨーロッパまではもたらされない高価な香料を生産しており、北西部に位置するランブリ王国については、「樟脳、その他の香料を豊富に生産し黄金と同じ重量で売られている」(東方見聞録：176)と述べられている。

5. ヒンドゥー儀礼におけるにおい

5.1 儀礼と供物

ヒンドゥー教の日常供養 (*nityapūjā*) について井田は以下のように定義している。「聖なる存在と考えられているイコンに対して行われる崇拜の儀式であり、そのもっとも原型的なものは、花や香、食物などの供物を献供することであると考えられる (井田 2012：24)。永ノ尾は「プージャーにおいては、まず、礼拝の対象となる神が招かれる。その神に座が与えられ、ついで、足を洗うための水、賓客に与えられるというアルギヤという水、さらに沐浴のために水が儀礼的に捧げられる。ついで、衣服と聖紐が与えられる。ビャクダンなどの香木のペースト、花、香煙、灯明、そして食べ物の供物であるナイヴェーディヤが、多くの場合セットをなして捧げられる。その後、あたかも食後の場合のように、口すすぎの水、果物、キンマの葉ターンプーラが与えられ、最後に右繞 (右側に向けて回ること) が行われる」(永ノ尾 1999：239)。プージャーとは、象徴的に神を賓客をもてなすようにもてなすことであるといえる。

クラッセンは、「古代から祈りの場に欠かせない、神と人をつなぐ香についての歴史的、匂いの象徴システムを実行することが儀礼であ

る」(クラッセン：13)と定義している。いずれの定義においても、儀礼とにおいは不可分の関係にあることがわかる。

または、フラーは、「ヒンドゥー寺院におけるプージャー *pūjā* (礼拝) は音とにおいの洪水の中で行われる。ドラムや鉦の音とともに、サンスクリットのマントラ (真言) が唱えられる。そこに線香と燃やした樟脳のむせかえるような煙とにおい、白檀のペーストのにおい、ジャスミンやバラ、マリーゴールドなどのお供えの花の放つにおいが満ちている」(Fuller：57)。人いきれとにおいと音で陶醉した信者たちはトランス状態に入りやすくなる。

ヒンドゥー教にはさまざまな儀礼がある。インドの人々は、祈りの場で香を焚き、生花も供える。花は色で愛でるよりも匂いで愛でるとされ、神への献花としては香りのいい花が好まれる。このように祈りの場でも各宗教によって、好まれる香り、その用いられかたも異なる。日常的に行われるプージャーや、特別な日や特定の期間に続けて行われる儀礼にも、必ず決められた供え物が不可欠である。儀礼に必要な供え物は、捧げる神の性質や好みと切り離しては考えられない。神話に遡るエピソードをもとに、神の好みの植物などを供える。どの儀礼にも不可欠なものは、花 *puṣpa*、樟脳 *kapūr=camphor*⁽⁸⁾、塗香 *gandha*、線香 *agarbatti*、円錐形の練り焚香 *dhūp* バラ水 *gulābjal* などいずれもにおいと密接に関係するものである。香りの捧げものは神と人をつなぐ重要な役割を果たすと考えられてきた。

5.2 マンガラ・ガウリー誓戒儀礼

ヒンドゥー教徒にとっては、ヒンドゥー太陽太陰暦のアーシャーダ *Āṣāda* 月 (グレゴリウス暦6～7月) 白半月10日めからカールティカ *Kārtika* 月 (グレゴリウス暦10～11月) 白半月10日までの4か月はチャートル・マース *Cātr mās* と呼ばれ、宗教行事が集中する期間である。神話によると、この間ヴィシュヌ神が

ヴァースキ竜の上で眠っている期間にあたり、神々の力も弱まり、悪霊悪鬼がはびこりやすいと信じられており、人間は我が身を守るために宗教行為を行う必要があるとされている。この4か月の間、一定の誓願などを行うことによって、断食や節食を行い、精神の修養に励むことが重要とされてきた。喜捨などもこの期間に行くと特別にご利益があると信じられている。実際この時期インド亜大陸は雨季を迎え、天候も不順なため、健康維持の意味もあり節食などが奨励されたのであろうと推察される。

この時期の誓戒儀礼を代表するものに、マンガラ・ガウリー・ヴラト *Mangala Gaurī vrat* (吉なるガウリー女神の誓戒) がある。これは結婚して5年めまでの婦人がシュラーヴァン *Śrāvan* 月の毎火曜日に集まって行う儀礼で、1年めは実家で行い、以後の4年は嫁ぎ先で行うことになっている。新婚の女性が数人集まって、穀物の女神アンナプールナー *Annapūrṇā*⁽⁹⁾ へのプージャーを行い、夫の長命と子孫繁栄、結婚生活の安寧を祈願する。

このプージャーに必要な品を列挙してみる。マンガラ・ガウリー・プージャーには16の品が不可欠であるとされる。それらは、綿、バナナの葉、ココナツ2個、パーン *pān* の葉⁽¹⁰⁾ 12枚、シヴァ神のお気に入りとしてされるベール *bel*⁽¹¹⁾ という果物の葉、トゥルスィー *tulsī*⁽¹²⁾ (めぼうき/バジル) の葉、スパーリー *suparī* (ビンロウの実) 25個、乾燥ナツメ、アクシャター *akṣatā*⁽¹³⁾ (色つきの米)、ムーング・ダール *mūṅg dāl* (ひき割りの緑豆)、ハルディー *haldī*⁽¹⁴⁾ (ウコンの粉)、クムクム *kumkum*⁽¹⁵⁾ (朱粉)、パンチャームリタ *pañcāmṛta*⁽¹⁶⁾ (ミルク、ヨーグルト、ハチミツ、砂糖、精製バターを混ぜたもの)、赤いハイビスカスの花、ドゥールヴァー草 *dūrvā* (イネ科のギョウギシバ=緑色の細長い草)、ダクシャナー *dakṣaṇā* (僧へのお礼=現金)、緑色のバングル *baṅgl* (腕輪) である。これらをタパックという儀礼用の銀の皿に載せておく。そ

のほか、上記の供え物を女神の像に捧げる際に用いられるパンダ *panda* (銀の椀)、パリー *pālī* (儀礼用匙)、タームハン *tāmhan* (儀礼に用いた水などを流すための鉢状の食器) などが用意される。実際の儀礼におけるおの用の用いられたかたをみてみたい。

5.3 マンガラ・ガウリー誓戒儀礼次第

まず、「*Śrī Mangalagaurī purasanna*」のマントラ(真言)で始められる。儀礼は常にグルジーと呼ばれる一族のパンディット(司祭、僧)が指導し、彼がマントラを先導し、女性たちはそれを復唱する形で進められる。

グルジーがマントラを唱える間、儀礼の参加者たちはアクシャターを右手に握って待つ。儀礼の主催者が台の上に女神の像と、タークと呼ばれる銅板(神を象徴するもの)を置くと、アクシャターを女神に捧げるしぐさをし、それを捨て、パリー(儀礼用の匙)で手に水をかけて浄める。続いて、台の上に米と女神に捧げる食事の象徴であるムーグ・ダール(緑豆)を置き、その上にスパーリーを置いたあと、再び水で手を浄める。花を水に浸し、それを振ってスパーリーに水をかけ、花を捨てたあと再び水で手を浄める。続いて、クムクム(朱粉)をつまんで綿にかけたあと、綿で数珠状のものを作り、スパーリーの上に置く。これは女神の衣服を象徴している。その上にアクシャターをかけ、クムクム、アシュタガンダ⁽¹⁷⁾をかける。その上にジャスミンなど香の良い花、赤いハイビスカスを置く。樟脳に火をつけ、香を焚き、アールティー(献火の儀礼)を行う。次いで、ココナツの破片の上に黒砂糖を置いたものを台の上にセットし、ハルディーとクムクムをかけその上に花を置く。そのあと、水で手を浄める。続いて、パーンの葉の上に、スパーリー、ダクシナー(僧へのお礼のコイン)乾燥ナツメを置いたものを台の上にセットし、脇に各自持参した果物を供え、水で手を浄める。続いて小分けに束にしてあるドゥールヴァー草の一部をとり、

ハルディーとクムクムをつけてパーンの葉の上に置く。

それが終わると、タークの上に全員で手を載せ、タークにガンダとアクシャターをつける。儀礼用の甕にもガンダ、ハルディーとクムクムをつけ台の上で音を鳴らし、ハルディーとクムクムをまぜた水を全員の頭上に振り撒く。銀のパンダの上にアクシャターを敷いたあと、女神の像とタークを載せ、台の上に置く。アクシャターを女神像にも2回ふりかけ、匙でも水をかける。再び、ハルディーとクムクムを匙に入れ、像にかけ、その後、匙でも水を3回かける。同様に、パンチャーアムリタも匙で5回かけ、その後で水を2回かける。ガンダを混ぜた水を1回、ガンダのみをつけ、その後にアクシャターをかける。その上に花を置いて、手を浄める。

その後、パンチャーアムリタを入れた器の周りに手で2回水をまき、手を3回洗う。そして、女神像の上に花を置く。そのとき、先用意しておいたパーンの葉ともろもろの儀礼用セットの上に水をかけ、ナマスカル（合掌する）をする。再びクムクム、アクシャターをつけた花を女神に捧げ、ナマスカルをする。女神に捧げた花を取って匂いをかいでから捨てる⁽¹⁸⁾。そのあとに、匙で像に水を10回以上かけ（グルジーがよしというまで）その間に甕も鳴らす。

これで、女神への儀礼は終了する。花に埋もれた女神の像を取り出して、布で拭き、脇に置く。アヴィシェーク *avišek*（灌頂）の水は匙で数杯すくって別の容器にとり、女神のプラサード *prasād*（お下がり）とし、残りは捨てる。きれいに拭いた女神像の頭にガンダをつけ、アクシャターを3回かけ、クムクム、アシュタガンダもつける。香油をつけた花を像の上に置く。

緑色のバングル（腕輪）を女神像の周りに置き、同時に花も捧げる。そこへ参加者全員が

揃って手を置いたあと、ナマスカル（両手を胸元で合わせて合掌）を行う。そこへムーング・ダールと米をかけ、赤いハイビスカスの花を置く。アクシャターを数回に分けてかける。続いて、女神の像に衣服を象徴する綿を1本かけ、3種類の植物（トゥルスイーの葉、パールの葉、バラの花びら）を像が隠れるまで多量にかける。

その後全員で、アールティーを行い、マハーダクシナー（パーンの葉のセットとグルジーへの贈り物）を用意し、ココナツ片にハルディーをとクムクムをつけ、匙で水をかけ、花とアクシャターをかけ、台の下に置く。像にナマスカルをしたあと、全員で立って、像の周りを右回りに回る。

各自2回手を洗い、最初にそれぞれが設置したスパーリーの上にアクシャターをかける。それからグルジーにナマスカルをして、マハーダクシナーと31ルピー⁽¹⁹⁾をそれぞれグルジーに捧げる。参加者全員でグルジーの頭に上からアクシャターをかけ、各自グルジーにシュパーリー、パーンの葉、ココナツ1個を捧げる。それらを受け取ったグルジーはその場から立ち去る。

礼拝が終わったあとは、女性だけでアールティーを行い、ポーティー *poī*（縁起物語集）を読み、その場で飛び上がりながら右回転に回って、全てが終了する。

この誓戒儀礼は、新妻が嫁ぎ先にもたらす豊穰性を高める目的で行われることは明らかである。つまり、家系を存続させる元気な子を産むことを祈願するものである。ヒンドゥー教の16の人生通過儀礼には含まれないが、準通過儀礼ともいえるマンガラ・ガウリー儀礼では、嫁ぎ先での不安な生活を同じ境遇の者同士分かちあい、儀礼を行うことによって、結婚生活での幸福を祈願するのである。ここで礼拝される穀物の女神アンナプールナーは手に匙をもった

姿(写真1)で表され、豊穡を約束する女神とされる。また、ガウリー女神の化身としても知られている。神話によると、修行者としていつも瞑想三昧であった夫のシヴァ神に食料を供給するために、ガウリー女神はアンナプールナー女神となってシヴァ神の修行を支えたのだという。シヴァ神とその配偶女神はつねに理想の夫婦像として讃えられ、礼拝されている。



(写真1) 匙を持ったアンナプールナー女神の像

6. まとめ

ヒンドゥー儀礼におけるおいの用いられ方を概観した。儀礼の場における非日常性の演出をするおいの役割は重要である。寺院など特別な場所でなくとも、聖水を撒き、香を焚いて場を浄め、そこに神を招来することによってそこは儀礼空間となる。捧げものとして、香料や香りの良い花は不可欠であり、儀礼の合間に必ず香りや花が捧げられていることがわかる。またアールティーでは樟脳が燃やされ、ゆらめく炎とともに独特の香りが満ち、厳かな儀礼空間

が創出される。樟脳の香りはアールティーを連想させるにおいとなっている。また焚香による香りのよい煙は、絆を確認する意味もある儀礼において、人間と人間、人間と神を象徴的につなぐ役割を果たしている。

「香を焚くことで儀礼空間と会衆は清められ、空間は霊の降臨にふさわしくなり、会衆は憑依状態に近づく」(クラッセン:197)。よい香りの中に身をおくということは、聖性と罪、聖と死の問題である。匂いの儀礼も、宗教生活のはじめに位置するのではなく、聖性の中核に存在し、その文化の最大の希望と恐れ、神々からの承認と援助への希求、神々の否認と災厄に対する恐れ、社会内および人間関係の境界にかかわる懸念などを表現し、演ずる(クラッセン:195)。

ヒンドゥー儀礼における感覚的経験の中では、臭覚が重要な位置を占めているといえる。視覚的には女神像が花や葉に覆われていくさまを目にし、聴覚的経験はグルジーの唱えるマントラと時々鳴らされる鉦の音のみであるが、臭覚的に天然の花の香りや香料、薫香など複雑なおいを経験することになる。

外川はヒンドゥー儀礼における匂いの役割を「喚起力」に求めている。もうもうたる白煙と、濃厚な香りに満たされた神殿の光景は、強烈な匂いの体験として、インプリンティング(刷り込み)がなされる。その後数年たっても、この匂いの体験は同じプジャ(プージャー)の匂いによって呼び覚まされることになる。それは日常的には概念化され自覚されることはないが、いったん匂いをかげば、すぐにそれであると認知され、追体験がなされるのである。そのようなプジャの匂いの再認の効果は、儀礼における匂いの果たす重要な象徴作用のひとつといえるだろう(外川1993:67-68)。

儀礼におけるおいは、同じ空間にいわせられた人々と神との一体感を感じさせてくれる作用があることは前述した。そのにおいに包まれ

ると瞬間的に過去の記憶が喚起され、神を念想する状態に没入しやすくなる。儀礼が宗教的な目的を実現するために一定の形式・順序に従って行われる象徴的な行為の体系であるとするならば、決まったにおいの演出は儀礼に不可欠であるといえる。

注

- (1) インド、マハーラーシュトラ州の公用語。インド・アリア諸語に属す。
- (2) ムスク。雄のジャコウジカの腹部にある香囊から得られる分泌物を乾燥した香料。インドでは香油としても人気の高い香りである。
- (3) 「これほど脂粉の香にあふれているものはない。それはまた、発散性に飛んで身体の熱を去る。インドの自然に生活する人にとって、なくてはならない人間的な匂いである。」と述べている（山田 1980）。儀礼のとき以外にも、白檀のペーストで額にティラカという印をつける。また、白檀は体を冷やす効果があるとされ、暑いときに白檀のペーストを体に塗りこんだり、香油をつけることが一般に行われている。
- (4) ヒンドゥー教、仏教を横断してみられる思想潮流。根底にあるのは、完全に自由な行為する主体を目指すことである。6～8世紀の文献にさかのぼれる。教義の根本は自己と人格的絶対者の本質的同一性を求めることである。
- (5) ヴェーダの日本語訳にあたってみたが、香に関連する記載をみつけることができず、ヴェーダ学の専門家大島智靖氏にご教示いただいた。ヴェーダ聖典のなかに、長く家を空けていた父親が、「私はそなたのこうべを嗅ぐ、やさしき愛情のこのうえなきしるしなればばなり」つまり、子供たちの頭の匂いを嗅いで安心する記述がある。ヨーロッパ人のキスや抱擁と同じく親愛の情を示すもので、インドの伝統的挨拶である（クラッセン 172）。とあるが、具体的な出典は記されていない。
- (6) 満久崇磨『仏典の中の樹木：その性質と意義(3)(護摩の樹木)』には、迦尼迦羅（Karnikara, モミジ/ミウラジロ?）とある。
- (7) アラビア語で *lūban* である。芳香ゴムの樹脂、乳白色をしているために「乳香」の名がついた。サンスクリット語の *kunduru 1 ha* はアラビア産の模倣品であったといわれているが、詳細は不明。
- (8) サンスクリット語で *karpūra* と呼ばれる竜腦の代用品として、樟腦は中国でつくられる。本来の竜腦はマレイ半島南部、スマトラ半島西部、北ボルネオにのみ産出する天然香料であり、その代用品として13世紀以来中国で、15世紀以降に日本で作られ、輸出品として主にインドの消費にあてられたものが樟腦である（外川 1993）。
- (9) 穀物・食物を司る女神で、シヴァ神の配偶神であるドゥルガー女神の化身の一つとされる。マハーラーシュトラでは結婚式のあと花嫁が嫁ぎ先の家に初めて入る際、「アンナプールナー・ハラン（アンナプールナーの強奪）」という儀式が行われる。これは花嫁が隠し持ってきた女神の像を夫が見つけ出して、家の神棚に安置するという儀礼である。花嫁がアンナプールナー女神として象徴化され富をもたらすと信じられている。北インドでは、「アンナプールナー・カボージ」とよばれ、嫁入りのあと、実家に戻った際にアンナプールナー神に祈願して娘の幸せのために行われる招宴。
- (10) コショウ科の蔓木キンマ。儀礼に欠かせない。キンマの葉に石灰をぬりピンロウジやカテキューなどの薬味を加えて噛む嗜好品もパーンという。
- (11) ミカン科小木、ベルノキ。ツルクサでブドウ大の濃い紫色の実をつける。シヴァ神が好む植物とされる。子宝や繁栄を象徴する。
- (12) シソ科カミメボウキ。ヒンドゥー教徒にとってはヴィシュヌ神の配偶神ラクシュミーの化身として神聖視される。
- (13) 神に供えられる生米。ここでは着色したものを用いていた。米は豊穰を象徴する。結婚式などでも花嫁と花婿が儀礼で初めて顔を合わせるときに、周りの参列者がアクシャターを両者に振りかける。
- (14) ターメリック ウコンの根茎を乾燥させて粉末にしたもの。色づけとともに、殺菌作用もあり欠かせないスパイス。吉と豊穰の象徴としてウコンの黄色は儀礼に不可欠である。
- (15) 明礬、酸などを原料として作った赤い粉末。ウコンの黄色と共にクムクムの赤色は儀礼に欠かせない。
- (16) パンチャは5、アムリタは不老不死の妙薬、甘露の意味。ヒンドゥー儀礼に欠かせない神への供えもの。
- (17) 8種の香料を混合して作る香料。白檀、樟腦、サフラン、ウコン、麝香、香油など。
- (18) 花のにおいをかぐという行為について。花は色や形よりもにおいを神に捧げるといわれる。神に供える前の花は決してにおいをかいではいならない。ここではお供えのお下がりとしてにおいをかいで、捨てている。
- (19) ヒンドゥー教徒はご祝儀に必ず1ルピーを加える。割り切れない数が縁起がいいとされる。

引用 (または参考) 文献

- 味の素の文化センター編『Vesta, No.98』特集におい
- 青木保『儀礼の象徴性』(岩波現代文庫, 2006年)
- 青木富太郎『東方見聞録』(社会思想社, 1980年)
- バートン, ロバート(高木貞敬ほか訳)『ニオイの世界—動物のコミュニケーション』(紀伊国屋書店, 1978年)
- コルバン, アラン(山田登世子・鹿島茂訳)『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』(新評論, 1982年)
- ダン, スペルベル(菅野盾樹訳)『象徴表現とは何か—一般的象徴表現の試み』(紀伊国屋書店, 1974年)
- 永ノ尾信吾「ヒンドゥー祭祀の形成と展開」『南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波講座世界歴史, 第6巻, pp.225-244. (岩波書店, 1999年)
- Fuller, C.J. *The Camphor Flame—Popular Hinduism and Society in India*, Viking, 1992.
- ゲレ, アニック(今泉敦子訳)『匂いの魔力』(工作舎, 2000年)
- 東原和成『においと味わいの不思議』(虹有社, 2013年)
- 井田克征『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈』(昭和堂, 2012年)
- 片倉もところ『ゆとろぎ—イスラームのゆたかな時間』(岩波書店, 2008年)
- 小泉武夫『匂いの中の日本文化』(NGS, 1988年)
- 小泉武夫『匂いの文化誌』(リプロポート, 1989年)
- クラッセン, コンスタンス他(時田正博訳)『アローマー匂いの文化史』(筑摩書房, 1997年)
- マジュプリア, T.C.(西岡直樹訳)『ネパール・インドの聖なる植物』(八坂書房, 1989)
- 満久崇磨『仏典の中の樹木: その性質と意義(3)(護摩の樹木)』(京都大学学術情報リポジトリ, KURENAI紅).
- 元木澤文昭『においの科学』(理工学社, 1998)
- 村川堅太郎訳註『エリュトウラー海案内記』(中央公論社, 1993年)
- 村山貞也『人はなぜ匂いにこだわるのか』(KKベストセラーズ, 1989)
- 中村祥二『香りの世界を探る』(朝日選書, 1990年)
- 西岡直樹『インド花綴り—印度植物誌』(木犀社, 1988年)
- 荻野洋一『そこが知りたい匂いの不思議』(雄鶏社, 1991年)
- 新潮社編『香りの記憶』(新潮社, 1990年)
- 竹沢尚一郎『象徴と社会—儀礼の一般理論』(勁草書房, 1987年)
- 外川昌彦「ブジャの匂いが呼び起こすもの—ヒンドゥー儀礼における感覚的特性についての試論」『コッラニ14』(コッラニ編集部, 1993年)
- 常盤新平ほか『誘惑の芳香』(講談社, 1992年)
- トンプソン, C.J.S.『香料博物誌』(東京書房社, 1973年)
- 山田憲太郎『香料の道—鼻と舌 西東』(中公新書, 1977年)
- 山田憲太郎『スパイスの歴史—薬味から香辛料へ』(法政大学出版, 1979年)
- 山田憲太郎『香料博物事典』(同朋社, 1979年)

